

あした、  
わたしは  
瀬戸内に。

「反りては備前長船の月にも似たる優姿」  
という歌の一節を聞いた  
その優美な姿が月に例えられたのが長船の名刀だった

備前長船の鍛冶は平安時代から続き  
現存する名刀の約4割以上が備前刀といわれる  
各時代の節目には必ず名工が輩出され  
刀剣王国の名を欲いままにして来た  
そんな数百年の長きにわたり、  
名刀を造り続けて来た備前長船だが  
ある日を境にその歴史に暗雲が立ちこめる

天正19年の長雨と暴風雨

吉井川の濁流は、備前長船の刀匠と  
その家族を容赦なく襲い  
一夜にして長船鍛冶は壊滅してしまう  
そんな中で九死に一生を得たのは  
室町後期以降、名刀工として名を残す藤四郎祐定  
祐定は長船の惨澹たる光景を目の当たりにして、言葉を失う  
そして、洪水によって跡形もなくなったこの土地で  
息子と共に、備前長船鍛冶の復活を目指す  
優美な名刀の影に、名刀工の生き様を見た

「ここには日本の精神が受け継がれている」



かつて中国地方随一の商業都市だった備前福岡。  
広い道路によって整然と区画されている。 P12

名刀の伝説は水と共に。

# 長船